

「寓意」としての《青ひげ》のお話

2021/12/22



今日も寒い日でした。お元気でお過ごしのことと存じます。新型コロナウイルスの新たな変異株「オミクロン株」がまた新たに現れたので、尾身茂政府感染症対策分科会会長は「私と関係ありません」と申ししておりますが、真相はわかりません。(笑い) 明日は、今年最後のNHKのオペラ講座の日です。難解な《影のない女》のあとを受けて、楽しいオッフエンバックの喜歌劇《青ひげ》を見ていきます。すでに、資料を2種類、解説書《青ひげ》と原作のペローの『青ひげ物語』をお配りしてあります。お読みになってお出かけください。青ひげ侯は、結婚すると花嫁を殺して、また、新しいお嫁さんをもらうのです。ペローの原作では、「その数、5人も6人も」と言っています。これも物語ですから、「寓意」(たとえ話)です。どうやら、結婚が恐い若い娘たちが考えたお話なのでしょう。

ペローの原作も、このオッフエンバックの喜歌劇も、最後にはハッピー・エンディングで終わります。喜歌劇の王さまオッフエンバックは、この陰惨・無惨とも思える物語を、滑稽な農村のお話として、原作にはない、沢山の登場人物を登場させます。個性的な人物ばかりで、王さまあり、その下の領主さまあり、それに仕える大臣あり、行方不明の王女さまと王子さまがいて、怪しげな錬金術師がいて、村のお転婆娘に、そのライバルの娘たちがいて、侃々諤々(かんかんがくがく)、喧々囂々(けんけんごうごう)、支離滅裂(しりめつれつ)、驚天動地(きょうてんどうち)のお話が展開されます。なかなか、物語としては楽しめます。

ただ、これが若い娘の「寓意」だけではなく、むしろ、奇才オッフエンバックの作品ですから、ときの政権フランス第二帝政への風刺劇でもありました。当時、ナポレオン・ボナパルトの甥のルイ＝ナポレオンがフランス皇帝で、彼は実生活では大変な女好きで、外に対しては権威主義者でした。言論

や出版の自由などを大幅に規制したので、それを、面白おかしく批判したのがオッフェンバックです。登場人物それぞれが、だれかのモデルだったのでしょう。パリの市民は大喜びでした。当時の時制を風刺した際物(きわもの)が多いので、時代が変わると、オッフェンバックの人気は衰えます。20世紀に入ってから「オッフェンバック・ルネッサンス」が起きました。第二次大戦後の東ベルリンのベルリン・コーミッシェ・オーパーで、演出家ヴァルター・フェルゼンシュタインが《青ひげ》をとりあげて大成功を納めました。明日はこのフェルゼンシュタイ版でみます。ドイツ語です。年忘れ、お笑いで楽しみましょう。「では、よいおとし……」、それは、明日、お会いしてからのごあいさつ。

都築正道